

いのちめぐる南三陸

東日本大震災で大きな被害を受けた東北で、多くの人たちが地域の未来をつくるための活動をしている。気候変動の抑制や、誰一人置き去りにしないコミュニティづくり…。彼らの活動は、持続可能な世界を実現するために国連が掲げる17の目標（SDGs）とも重なる。3.11から生まれ、未来へとつなげる取り組みを第1、第3火曜日に報告してもらいます。



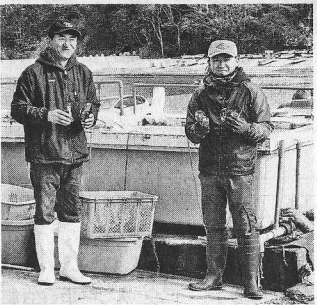
宮城教育大教育学部准教授

山内明美さん



「森里海ひといのちめぐるまち南三陸」をテーマに街づくりを進める宮城県南三陸町では、民間レベルで南三陸SDGsの取り組みがはじまっています。

町は漁業が基幹産業ですが、東日本大震災後の地場産業の復興は、面積の約八割を占める森林から始まりました。二〇一五年に地元森林経営会社「佐久」がリーダーとなり、町有林を含む千三百十五畝で国際森林認証（FSC、COC認証）を取得しました。認



後親 戸倉つこ牡蠣を生産する藤清広さん、仲弥さん
子＝宮城県南三陸町で

証は環境に配慮し、地域の利益にもかなった形で生産された木材に与えられるもので、県内では初取得です。

南三陸の林業家にとって、山を持続可能な状況で管理するのは当たり前のこと。その上で、町を象徴する鳥であるイヌワシの生息環境の保全活動など、生きとし生けるものが一緒に暮らせる山を目指しています。

一方、南三陸町戸倉の漁師たちは「戸倉つこ牡蠣」というブランド名で、日本初の国際養殖漁業認証（ASC、COC認証）を取得しました。

東日本大震災後の立ち上がり途上で、戸倉の漁師は、志津川湾の養殖設備を震災前の三分の一に減らす決断をしました。かつてはイカダが過密状態で、栄養が行きわたらないためにカキの品質劣化の原因ともなっていました。

設備を減らしたことで、出荷まで三年かかったカキが、一年で実入り豊かなカキへと成長するようになり。さらに仕事の時間も減って、漁師のお父さんは子どもの授業参観に行くことができるようになったそうです。

震災後に出稼ぎしていた若い漁師たちも続々と帰ってきました。二十〜三十代の後継者が三割を超える将来有望な産業になりました。

さらに、林業家と漁師の共同プロジェクトも生まれつつあります。甚大災害から立ち上がった南三陸の底力で、SDGsの世界モデルを描く夢が広がっています。「戸倉つこ牡蠣」もぜひ召し上がってください。

※この連載は、NPO法人JKSKと被災地の女性団体『結結プロジェクト』の協力を得ています